校長ニューズレター（第 34 号・9 月号） 宜野湾市立長田小学校校長：横山芳春

「号令」について

①前へならえ

子どもの教育において大事なことのひとつは、**自分の頭で考えて行動できる**ように育てることです。たとえば、子どもたちを整列させる場合、簡単な方法は、「前にならえ」と号令をかけること。しかし、いつまでもこれをやっていると、子どもたちは自分の能力（この場合は空間を把握する能力）を開花できません。

子どもたちは小学生ともなれば、自分の頭で考えて前後左右の距離感を把握し、号令が無くても並べるようにしていきたいものです。

さて、インターネットで「前へならえ」を調べてみるとつぎのことがわかりました。

これは軍隊の遺物でした。

「前へ」の部分を「予令（よれい）」といい、「ならえ」が「動令（どうれい）」といいます。「前へ……」と言われたら意識を前にもって行きます。準備段階。この時点で動令は何だかまだわかりません。どうすればいいのでしょうか。いざ「すすめ」だったら歩き出し、「ならえ」なら整列するわけです。ですから「右へならえ」だってあります。号令をかける側も「前へ」と言ってしまってから方向を訂正する場合「もとへ」でもどらせます。

さらに辞書で調べました。

よ - れい【予令】-日本国語大辞典

〔名〕号令のうち、ある動作を起こさせる動令に対して、その前に添えてどういう動作をするのかを示す号令。「まわれ、右」の場合の「まわれ」の類。＊**歩兵操典**（軍隊おける歩兵の運用のマニュアル）〔１９２８年〕

どう - れい【動令】-日本国語大辞典

〔名〕号令のうち、どういう動作をするかを示す予令に対して、その動作を起こさせる号令。「まわれ、右」の場合の「右」の類。＊**歩兵操典**〔１９２８年〕

号令は、日本陸軍の「歩兵操典（そうてん）」に定められていたのです。ここで「操典」とは、「教練の制式、戦闘原則および法則を規定した教則の書（広辞苑）」のことです。

本校では、号令をできるかぎりやめて、子どもたちが自分の頭でかんがえて、自分の立ち位置を決められる子どもを育てることを目指しています。前の子や左右の子との距離感を自分で考えて決められる子どもたちを育てたいと考えています。

②「静座」で授業の始まり

学校でよく見かけることがもう一つ。授業の始まりに、先生か係りの子が「静座」という号令からスタートします。これも号令の一つですね。

同じようなことを問題視した元校長がこういうことを言っています。

『（号令をかけなくても）子どもがいつのまにか引きこまれてしまうような授業をしていれば、授業が始まると同時に子どもが集中するものです。』

いつも質の高い授業をしておれば、子どもたちは授業を楽しみに待つようになります。こういった子どもたちを育てておれば、「静座！」と号令をかけなくても、子どもたちは静かに待つようになります。なお、号令は子どもたちを緊張させているのであって、集中力を育てているのではありません。号令から「自分の頭で考えて行動する」子どもを育てましょう。自分の頭で行動する子どもは、学校ではもちろん質の高い授業で育てることになります。